

## 小学校外国語科・外国語活動におけるCLILの単元開発

1. 担当者（代表者） \*菅原純也 \*\*ホール・ジェームズ

\*小田誠 大森有希子 金子裕輔 市川あゆみ 久慈美香子 高室敬

\*所属 岩手大学教育学部附属小学校 \*\*所属 岩手大学教育学部英語科

（平成31年3月4日受理）

### 1. はじめに

CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）とは教科の内容と英語運用能力の両方を統合させながら学ぶことができる学習方法である。CLILは児童を中心に据え、暗記や理解に偏ることのないバランスのとれた多様な学習活動を行うことが可能である。

CLILの良さの1つに、言語運用能力と資質・能力を並行して高めることが挙げられる。

このことは、次期学習指導要領で大切にされている3つの柱（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう人間性など」）の育成に大きく寄与できるものだと考えられる。オーセンティックな目的・場面・状況において「言語の体験的理解を深める」こと「児童の興味・関心にそった活動の工夫により、指導の効果を高める」ことなど、「主体的・対話的で深い学び」の実現にも大きく関わると考える。

本プロジェクトでは、その多様な学びが展開できるCLILについて、小学校英語活動および英語科においての可能性を追求するものである。

### 2. 方法

#### （1）研究方法

本プロジェクトでは、以下の2点を研究の重点として推進をした。

- ①本校におけるCLILの捉え
- ②CLILを用いた単元開発と実践

#### （2）研究計画

- 4月学部とのカンファレンス
- 4月～7月 第1期 授業研究（実践と開発）
- 6月岩手大学教育学部附属小学校学校公開研究会
- 8月指導内容検討会（振り返り）

10月学部とのカンファレンス

11月英語科授業研究会（附属小学校）

9月～12月授業研究（実践と開発）

2月第15回全国小学校英語活動研究会三重大会

### 3. 結果

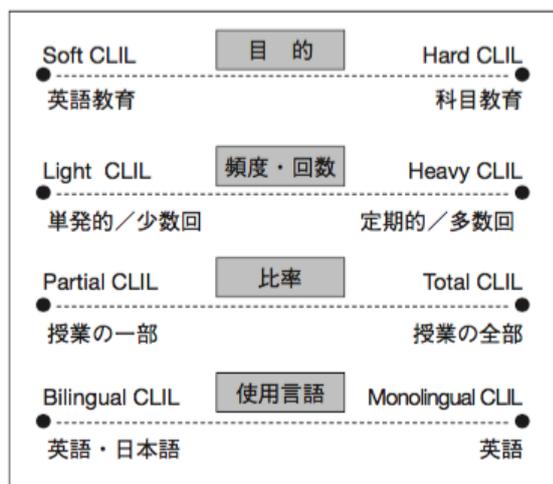
#### （1）CLILについて

まず、日本CLIL学会会長の笹島氏はCLILについて以下のようにとらえている。

CLILは、Content and Language Integrated Learningの略称です。教科科目やテーマの内容（content）の学習と外国語（language）の学習を組み合わせた学習（指導）の総称で、日本では、「クリル」あるいは「内容言語統合型学習」として呼ばれ定着しつつあります。主に英語を通して、何かのテーマや教科科目（数学（算数）、理科、社会、音楽、体育、家庭など）を学ぶ学習形態をCLILと呼ぶ傾向があります。CLILの主な特徴は、学習内容（content）の理解に重きを置き、学習者の思考や学習スキル（cognition）に焦点を当て、学習者のコミュニケーション能力（communication）の育成や、学習者の文化（culture）あるいは相互文化（interculture）の意識を高める点にあると言えるでしょう。

（東洋英和女学院大学 笹島茂氏 CLIL学会ホームページからの引用）

このことからCLILには4つのCがあることがわかる。（Content, Cognition, Communication, Culture）さらに、その内容において池田氏は以下のように説明している。



これらと、小学生の発達段階を考慮し、以下の要素を含んでいるものを本プロジェクトにおけるCLILとした。

- ①content：英語活動及び英語科の学びにおいて、1つ以上の他教科と関連させた内容であること。
- ②communication：学びの文脈の中に位置付いていること。
- ③cognition：自由度のある英語運用を行うこと。
- ④culture：自由度のある英語運用を支える単語や表現方法の習得も合わせて行うこと。

① content：英語活動及び英語科の学びにおいて、1つ以上の他教科と関連させた内容であることについて

我々は、単元構成をカリキュラムマネジメントの視点から捉えることとした。その際、同時期に同じような目標や内容の活動（content-based model）を構成したり、育みたい資質能力（competency-based model）で構成したりした。

例えば、国語で学んだことを英語でもできないか考えたり、学習旅行の期間に仲間と協力することを目的としながら共感的思考を高める単元を構成したりした。

②communication：学びの文脈の中に位置付いてい

ることについて

社会において英語を用いて他者と関わることは、日常の場面として起こりうることである。しかし、英語教育において、その日常性を欠き、ただ英語運用のためだけの場面で学びを行うことがある。そうではなく、目的・場面・状況に沿ったオーセンティックな学びであることが身についたことを発揮する英語運用であるとする。そこで、単元はじめにゴールを示しそのストーリーの中で必然性のある学びが行える設えにすることを、そのストーリーの中でCLILが行われることとした。

③cognition：自由度のある英語運用を行うことについて

CLILにおいて、4つのCはどれも大切なものである。我々はその中でも、Cognition（思考）に重点を置いて単元を構成する。次期学習指導要領において、英語活動及び英語科における言語活動は、定型表現だけのやり取りではなく、目的・場面・状況において自由度のある英語運用が求められており、その場面において思考力。表現力・判断力が発揮されるからである。そこで、学びの中に、taskを設定した。（TBLT：自由度のある英語運用のかなで与えられた課題を解決しようとするにより英語運用能力を高める学び）

④culture：自由度のある英語運用を支える単語や表現方法の習得も合わせて行うことについて

自由度のある中で英語を用いて自分の考えや意見を伝えるためには、基礎となる英語の知識及び技能（話す聞く読む書く）が必要である。小学校段階において取り上げてこの知識及び技能を高めることはスムーズなコミュニケーションにとって重要である。



(2) 授業実践

4年にじ組「What do you want? ほしいものは何かな?」

①content

国語科「俳句を作ろう」

英語活動「What do you want? ほしいものは何かな?」(Let's try!2 Unit7)

本単元の学習では、国語の俳句や短歌の学習を想起させる。また、海外にも俳句や短歌があることを示し英語で作る俳句は、「五・七・五」のリズムがないことや既習の簡単な単語で作れるということなどを気付かせる。

②communication

単元のゴール 英語俳句発表会

「Let's try!2Unit7」に新出する食べ物の単語は、俳句の創作に使われる季語になることにも気付かせ、それらを使って「英語で俳句を作ってみよう」という単元のゴールを示す。欲しい食材などを尋ねたり要求したりするとともに、考えた英語俳句を紹介し合う。

③cognition

4年生の外国語活動も後半に入っているこの時期は、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、友達とコミュニケーションを図る体験を積み重ねてきている。それを踏まえ、本単元では、これまでに慣れ親しんだ表現を使って児童同士で二往復以上のやり取りをするような活動を設定し、言葉で通じ合うことの楽しさを十分に感じさせる。

④culture

単元のゴールを見据え2つのウォーミングアップとして、“Do you have a ~?”の表現を使ったやり取りを行うゲームを行い、コミュニケーション活動の楽しさを十分に味わわせる。

また、カードを用いて、食材の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に繰り返し取り組み、慣れ親しんだり、相手に配慮しながら、自分のオリジナル俳句を紹介するための表現にも、手持ちのカードを用いながら取り組ませる。

	学習内容
1	・英語でも、俳句が書かれていることを知り、単元の最後で英語で俳句を作ることを知る。
2	・食材の言い方や、欲しい物を尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。
3	・食材の言い方や、欲しい物を尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。
4	・季語を集めて、英語で俳句作りに挑戦する。

考察

4年生にとって、英語で俳句を作る活動は、ハードルが高いように思ったが、身近な物を使うことによって、意欲的に取り組むことができた。そのために、単元前半や短時間学習などを用いながら、語彙を増やすことが重要である。うまく表現できなくても、言葉さえ知っていたら、つなぎ合わせながら説明することができる。また、聴く方も相手の伝えたいことを察しながら、聴こうとする態度も養うことができる。

俳句なので、多様な表現が生まれるところもよさである。自分の感性を生かしながら、対象をとらえ表現することは、豊かな言語感覚を養うことと合致している考える。

しかし、知っている表現が少ないので、自分の思いを伝えきれない児童もおり、どのくらいのレベルでの英語表現を目指すかは、次への課題といえる。



5年たけ組「I want to go to Italy 行ってみたい国や地域」

①content

社会科「世界とつながる日本の工業」

英語科「I want to go to Italy 行ってみたい国や地域」(We Can 1 Unit 6)

②communication

単元のゴール 自分のおすすめの人に友達を誘うこと

世界には様々な国があり、そこにはその国特有の文化があることに気付かせ、興味をもたせる。次に、友達との活動をとしながら「Where do you want to go?」「I want to go to～」「I want to [see visit eat buy]」等の表現使って聞いたり話したりすることに慣れさせていく。また、それらの活動を通して自分ならどこに行きたいか、友達はどんな国に興味があるのだろうかという関心を高めていく。コミュニケーション活動を通して、友達はどんな理由でその国を薦めているのかに興味を持って訪ねたり聞いたりする態度を育てたい。

③cognition

英語科での「Where do you want to go?」と社会科の「世界とつながる日本の工業」との関連で「貿易ゲーム」を位置付ける。既習の英語表現を使ってのゲームを通して、貿易の仕組みを知り、貿易について考えることで社会科と英語科の学びの理解について相乗効果があると考えられる。

④culture

本単元では、初めに「We Can 1」を使い、国についての紹介の仕方を聞いたり、自分の行ってみたい国について考えたり、調べたりする活動を通して外国の国々に対する興味を持たせる。その際に、「can～」や「want to～」の表現を自分の発表の中で使えるようにする。また、国名に興味をもたせ、国旗の視覚情報と共に十分に音声で慣れ親しんだものを書き写す、あるいは、自分の意見を発表するために情報を整理し、語順を意識しながら書き写すという指導が始まる。こうして、自分が書いた文をくりかえし黙読したり、音読をし

たりすることが記憶を支え、発表活動につながることを体験させていく。また、ウォーミングアップやアクティビティなどを通して、使わせたい表現を繰り返し発話したり、課題設定で社会科の学びを想起させたりしながら、工業生産における日本の特徴にも触れさせたい。

	学習内容
1	オリエンテーション
2	紹介したい国名や場所、食べ物を聞いたり、言ったりする。
3	お薦めの国を聞き、行きたい国を考える。
4	
5	お薦めの国を紹介したり、聞いたりする
6	行きたい国について理由を交えながら発表する

考察

単元を通して、目的意識をしっかりと持って英語の表現を使うことで意欲を持続することができた。特に、本時では、「自己紹介」「税関」「国の交渉」と必要感のある場を設定することで、既習事項なども取り入れながら英語を使う様子が見られた。また、本時の振り返りを見ると、英語の学習だけでなく、社会科の貿易についての学習の深まっていることが分かった。

しかし課題も残った。英語ゲームで取り扱った国の情報が、児童にとって偏った情報にならないように注意しなければならない。また、他の教科との関連を図る際には、内容過多にならないように、注意しなければならない。



6年しらかば組「I like my town.」

①content

総合的な学習の時間「グローバル人材になろう」  
 社会科「政治の仕組み」  
 英語科「I like my town. 自分たちの街・地域」  
 (We can! 2 Lesson4)

グローバル化が叫ばれる社会において、世界規模で起こっている課題に目を向けながら、地域を知ったり愛したりすることは大切なことである。本教材は、地域を見つめ直すことで自分の地域を知り、好きになる活動に取り組むことのできる教材である。その中で、自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりして集めた情報を整理し、地域の好きなどころなどについて考えを形成、再構築することで英語科における見方考え方も発揮されると考える。さらに、課題解決を目指して、言葉を紡ぎ合わせコミュニケーションを図りながら、仲間と共に新しい価値を創り出すことができる。

②communication

単元のストーリー

グローバル人材として、外国の方に盛岡の街を紹介しよう。

本単元のゴールを「盛岡マップを作り、留学生の方に提案しよう」とした。これは、総合的な学習の時間で学習している「グローバル人材になろう」において、留学生の方と交流し盛岡を紹介する学習とリンクしている。まとめたものを元に、盛岡の街を案内する場面において活用しながら紹介していく。

③cognition

学んだことを基に英語を表現する場面である。お互いの思いを伝え合うことで定型表現を用いて表現したり、自由度のある表現で会話を紡いだりさせたい。この場合、英語運用は子どもに委ねられているため、「必要感のある場面における主体的な学び」や、「仲間と解決する場面における対話的な課題解決」など、児童は思考力・表現力・判断力を駆使しながら学びを深めていくと考える。

盛岡にほしい施設の基に、「バスセンター跡地に立てたい施設」について考えさせたい。正解はな

いが、自分なりに英語で理由を伝えたり、友達の考えに質問したりしながら、自分たちの夢の盛岡が形成されるような話し合いにしていきたい。会話が紡げるように、伝えられた内容に関して、一文質問をすることで継続的な会話になるようにしていきたい。

④culture

ウォームアップは、毎時間、既習事項や本時にかかわる言い方を復習している。繰り返し発音したり、読んだりするなど多様な活動を取り入れ定着を図りたい。

	○目標	・主な学習活動
1	○活動の見通しをもとう ・オリエンテーション	単元のストーリー「グローバル人材として、外国の方に盛岡の街を紹介しよう。」 ・盛岡の伝統、歴史、施設等を想起させる。
2	○街の紹介をしよう ・様々な地域の説明を聞き、理解する。 ・施設の表現の仕方を知る。We have ~.	
3	○盛岡の良さを見つけよう We can (eat enjoy play) I like ~	
4	○盛岡の課題を考えよう。We don't have ・施設を作る。We don't have ~. I want a~.	
5	○バスセンターに建てたい施設を考えよう。 I want a~. We enjoy ~ing.(fishing jogging shopping reading dancing singing walking)in~	
6	○盛岡のよさを見つめなおそう。 ・今あるものを見つめ直す We have ~.We don't have ~. We enjoy ~ing.(fishing jogging shopping reading dancing singing walking)in~.	
7	○盛岡のよさを発表しよう ・施設を作るか見つめ直すかについて自分の考えを提案しよう。 ・自分の考えをまとめる。・夢の街を考える。	
8	○夢の街を提案しよう ・夢の街を提案する。 ・提案した街を評価し合う。	

## 考察

バスセンター跡地に設置したい施設について考え合わせた授業について考察する。

課題の設定では、画像資料を用い、バスセンターについて想起させ、バスセンターの歴史や地理的要因、市民の思いなどから、バスセンター跡地の利用について課題設定を行った。市長が実際に提案しているHPや新聞資料などオーセンティックな資料を提示することで、課題に対し身近に感じたり、盛岡の喫緊の課題として必要感を持って捉えたりすることができた。

タスクでは、友達が選んだカードについて質問しながら明らかにしていくタスクを行った。自分の情報を伝えたり、相手の情報を理解したりしながら課題解決に取り組んでいた。例えば、カードを当てるとともに、会話を紡ごうとする(3~5ターン程度)姿が見られた。教師も、モデリングや問い返しなどを通して、伝えたいことや用いたい英語を紡げるように関わることができた。

バスセンターの利用について話し合う場面では、班の中、時間を決めて、時間内は会話を紡げるように、必ず一文質問で応答するようにした。伝える側はその場所の良さやできることなどを具体的に伝えられるようにした。このことにより、お互いに聴いたり尋ねたりすることに必要感が生まれ会話を紡ごうとすることができた。

### 4 その他の地域貢献活動

英語授業研究会

期 日 平成30年11月3日(土)

内 容 授業公開・授業研究会

岩手大学教育学部英語科准教授ホール・  
ジェームズ先生のワークショップ

様 子

休日にもかかわらずたくさんの参加をいただいた。英語科への関心が高いことがうかがえる。参加者からは、このような活動に好意的な意見が多く、開催するよさがうかがえる。

研究を通して明らかになったことを発信することも大切な地域貢献活動と考えている。この面から考えると、良い地域貢献活動であった。



## 5. まとめ

### 成果

- ・ CLIL を用いた単元構想について、小学校段階に応じた内容を考えることができた。
- ・ 実践を通して、CLIL の有用性を感じた。特に、子供の学びにおいて、必要感や必然性を持ちながらオーセンティックに学ぶことができることによさを感じられる。

### 課題

- ・ より実践を重ねることにより、次期指導要領や教科書と対応した年間指導計画を作成していくこと。

### 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただいた各校の子供たち、先生方に感謝いたします。

また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた附属小学校英語科研究部の皆様に感謝します。